二〇二二年度　東洋英和女学院中学部　入学審査問題Ａ

受験番号　写　氏名

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。答えは、指定されたもの以外はすべて黄色の解答用紙に書きなさい。

この春、栄養大学を卒業してから、悠子は自分が卒業したミッションスクールに就職していた。彼女が栄養士を**ココロザ**したのは、女でも資格を持っていた方が社会へ出るのにはるかに有利だということと、**元来**が台所でお料理を作ったり、おいしいものを食べることに強い興味をもっていたからである。が、栄養学と本格的に取り組むうちに、悠子は具体的に、小学校の給食を専門にやりたいと思うようになっていた。子供の頃の記憶に、給食で、おいしいと思ったものがなかったせいである。日に三度食べるものの一回が、いつもおいしくなかったとしたら、それはずいぶん不幸な日々だったと言わねばならない。育ちざかりの子供たちに、おいしいと舌つづみを打たせながら、栄養価の高いものをたっぷり食べさせたい。それには、味つけだ、と悠子は思った。栄養大学では、料理も専門家の実習指導を受ける。洋食も和食も、中国料理も、悠子はその道で**高名**な料理の先生たちにつき、夏休みには、大学とは別に、自分であちこちの料理学校の講習を受けたりしていた。

悠子の家には、何しろやかまし屋の老人がいるし、悠子の父親は食通を注自認（自分でもそうであることを認めること）している。悠子が家で実習するときは、母親や兄弟もそろって批評家になった。身内だからひどいことも言われるかわり、料理の先生なら決して言わないほめ方にも出会い、悠子は自分の腕にかなり自信を持つようになった。父親が面白がって、東京の有名料理店へ、悠子の勉強と称してちょくちょく連れて行ってくれたのが、幸運だった。悠子は自分の味覚が並より優れていることを自覚するようになり、［Ａ］栄養士として給食を担当することに大きな意義を感じるようになっていた。

母校では、卒業生の悠子を栄養士として喜んで迎えた。終戦後すぐから給食係をしていたマグダレナ修道尼は、両手をひろげて悠子を抱きよせ、

「神さまが、一番、一番、お喜びですと思います。はい。子供のため考える、一番、一番、大切のことね」

と言って、しばらく放さなかった。シスターの胸の中で、そうだ、①このシスターがスペイン風の味つけで子供を苦しめていたのではないか、と悠子はふと考えた。修道院でも、料理の受け持ちはこの修道女で、戦後の食糧欠乏時代には外国人注特別措置（とくべつなあつかい）で届けられる小麦粉や油脂で、スペイン料理を作り続けていたという。

しかし悠子が卒業後、②大きな抱負を持って母校の調理室に入って行ったとき、給食が美味と縁遠い原因は、第一に予算というものがあるからだと思い知らされた。それでもミッションスクールは私立だから、公立よりも予算が多いのだという。悠子は③ぼう然としながらも、こうなればそれこそ料理法と味つけしかないと思った。

そして悠子の味覚に合格したにんじんもほうれん草も、子供たちから拒否されて、調理室の洗い場にもどってくるのだ。残飯入れは、緑と赤で［Ｂ］いっぱいになり、毎日養豚業者がひきとりに来る。

土曜日のかき卵は、我が家では好評だった。悠子が言い出すまで、注弓香（悠子と同居している祖母の名前）でさえ豆腐が入っていることに気がつかなかった。

「豆腐入りのかき卵か、なつかしいねえ」

悠子の父親は、幼い日を思い出して目を細めた。

日曜日のカレーライスも、誰もルウの中ににんじんが入っているとは気がつかなかった。肉は、給食の予算より倍も多く使ったし、ブイヨンも入れて、味は小学校よりいいはずだったが、この分なら子供たちもにんじんには気がつくまいと、悠子は自信を持った。

豆腐入りかき卵は、子供たちがどんな顔をして食べているか見たくて、食堂の方をのぞきに行き、給食が終わると職員室に飛びこんで、悠子の恩師や先輩たちに、

「今日のかき卵、お豆腐入れたんですけど、どうでしたかしら」

と言いに行った。

「あら、量が多いので感激して食べたわ」

「お豆腐ですって、本当に入ってたの。どうやって」

職員室の反応に④気をよくして、シスター・マグダレナに報告すると、

「悠子さん、天才です。私、知らなかった。卵だけと思いました。私、お豆腐だめのことです。お豆腐、おお」

目をむいておどろいている。よっぽど豆腐ぎらいだったのだろう。

翌日のカレーライスは、調理の段階で、シスターたちは、電気ミキサーでにんじんをこなごなにしてしまうのを見て、感心した。

「悠子さん、すばらしいのこと。天才です。これなれば子供たち、にんじんみんな食べます。素晴らしいのこと。私、校長さまにすぐ報告します」

シスター・マグダレナは出来上がったカレーライスを自分で校長のところへ運んで行った。

この日、子供たちは、みんなにんじんを食べてしまった。カレーライスは、給食の中では最も人気のあるメニューなのである。⑤悠子は日記の中に、誇らかに「今日も成功」と書いた。

校長からも、職員室からも注喝采（大ぜいの人が感心していっせいに声を出してほめること）を浴び、二日続きの成功で、悠子は有頂天になった。⑥もはや敵はほうれん草しか残っていない。これを形も色も、ほうれん草ではない料理にするには何があるか。悠子は考えこんだ。

えんどう豆を裏ごしにしてクリームスープに仕立てるのを、一学期の末にしたことがあり、好評だったのを思い出した。あのときもミキサーを使ったのだ。そうだ、あれと同じ**ヨウリョウ**でやればいい。

水曜日に、⑦悠子は自分一人でほうれん草を洗い、ゆで、水にさらしてから、クリームスープの用意をし、ほうれん草はミキサーにかけた。スープに混ぜて加熱し、味わってみると、上々であると思えた。

「これ、なに、悠子さん」

シスター・マグダレナが、びっくりした顔でスープ用のカップに入ったものを見て聞いた。

「ほうれん草です」

「おお、ほうれん草。このスープ、ほうれん草。おお」

マグダレナ修道女がおどろいても、悠子の自信はゆるがなかった。ほうれん草は香気の強い注蔬菜（野菜、あおもの）ではないし、繊維も

写

それほど強くない。ミキサーにかければ原型はなくなるし、白いクリームスープで色が薄められれば、えんどう豆と間違える子だっているかもしれない。悠子は十二時五十分という食器のもどってくる時間が待ち遠しかった。食事中の様子を見に行こうかと、髪をしばっている頭巾を取り、調理室を出ようと扉のノブに手をかけたとき、扉が荒々しく開けられ、男の教師が飛び込んできた。初等科二年生の担当者である。

「君、なんだい、あのスープは」

相手の剣幕に、悠子はおどろいてすぐ返事が出来なかった。

「あのスープは、いったいなんだい」

「あのォ、ほうれん草をクリームスープに混ぜたんですけど」

「あれがほうれん草か、あの、まっ黒なスープが」

「そんなに黒くはないでしょう。うす緑色のはずですけれど」

「まっ黒だよ。僕のクラスじゃ、こわいと言って泣き出した子が二人もいるんだ。僕だって気味が悪くて□をつける気になれなかったからね。僕はこの学校に来て五年になるけど、こんなひどいスープが出たのは初めてだ。君ねえ、⑧料理は目で食べるって言うだろう。あんなきたならしい色では料理だなんて言えないよ」

そのころには、スープの正体に疑問を持った教師や初等科を担任しているシスターたちが数人も、調理室の入口に立っていた。

悠子の先輩に当たる一人が、口を次いだ。

「悠子さん、ほうれん草を、さらし忘れたんじゃないの」

「いいえ、一度ゆでこぼして水でさらしているんです」

「でも、あくが抜けきれていなかったみたいよ。だって、まっ黒なんですもの」

「すみません」

悠子には、思いがけない出来事だったが、ともかく頭を下げるしかなかった。教師たちの背後にシスター・マグダレナが心配そうな顔をしているのを見ると、⑨涙がこぼれ落ちた。

「ともかく、ほうれん草と分かっただけでも生徒に説明が出来ますよ」

「黒豆のスープですかって聞いた子がいるんですよ、私のクラスでは」

「いずれにせよ、無理しても飲めとは言いがたいわねえ」

「ちょっとね」

「僕の組じゃ、泣き出した子がいるんだよ」

「あら、私のクラスもよ」

日頃、給食を残すのはいけないと□をすっぱくしてキビしく言いきかせている教師のクラスほど、子供たちが受けたショックは大きいようだった。

十二時五十分。食器がもどり始めると、スープ用のカップには、どす黒い液体が入れたときそのままの量でもどってきた。調理室で働いている数人のシスターたちが、黙ってそれを残飯入れに捨てている。悠子はぽろぽろと涙をこぼしながら、一緒に食器を洗っていた。ほとんどのカップが、口をつけたあともない。悠子はその一つを、しみじみ眺めてみた。なるほど、黒い。調理室でクリームスープと混ぜたときには、こんなに黒ずんでいなかったのに。時間がたつにつれて、あくがクリームに勝ってしまったのだろう。悠子は一杯を一息に飲んでみて、味までしつこくなっているのに気がつくと、また涙がこぼれた。匂いまで、おかしい。

調理室で働いているシスターたちは、誰もものを言わなかった。もともと沈黙は、この修道会の古い掟の一つであったのだが、それにしても今日の無口なシスターたちが、心で悠子を（　　　）ことは明らかだった。悠子は調理室をそっと出た。二階の音楽教室が、ピアノも鳴っていないし、歌声もきこえない。一人で泣くには格好の場所だった。悠子は、誰もいない音楽教室にかけこむと、声をあげて泣いた。

しばらくすると、ひそやかなピアノ・ソナタが奏でられ始めた。ふり返ると、シスター・マグダレナが弾いていた。古いスペインに伝わるメロディらしかった。シスターの修道服は数年前に変わって、色はグレー、スカート丈は七分になり、髪も生えぎわが少し見えるようにグレーの頭巾をかぶっている。悠子が小学生の頃は、修道尼たちは中世以来の重々しい制服を着ていて、その頃は、髪の毛どころか、首筋も見せないように純白の布でおおいかくしていた。あの頃のシスター・マグダレナは、まだ若さが肌に残っていたし、髪もきっと今のように白髪ではなかっただろう。

美しい、ピアノ曲だった。弾き終わると、シスター・マグダレナは、悠子の視線を意識していたらしく、まっすぐに顔をあげて、悠子を見てほほ笑んだ。

「シスター、すみませんでした。あんなスープを作ってしまって」

「大丈夫のこと。私、とてもおいしいでした。栄養のスープね。私、みんな食べてしまいました。とてもおいしいでした」

⑩悠子は、また涙が止まらなくなった。豆腐入りのかき卵も、にんじん入りのカレーライスも、悠子は自分の家でテストをしてみて、その上で給食に実行したのに、前後二回の成功に有頂天になって、ほうれん草のスープは、思いつきをいきなり大量に作って子供たちのテーブルに送り出してしまったのだ。

「シスター、私が悪かったんです。注傲慢（えらぶって、人を見下す様子）だったんです。子供たちに本当にすまないことをしてしまったんです」

悠子は、泣きながら言ったが、声が言葉にはならなかった。

「大丈夫のこと。神さまご存じですと思います。一番、一番、大切のこと。神さまお分かりですと思います。⑪悠子さんの心、まちがってないね。ほうれん草、栄養あります。子供に食べさせる、大切なこと。これ、悠子さんの心。神さま、きっとお分かりですと思います」

シスター・マグダレナは両手をのばして、泣いている悠子の肩に手を置き、力強く言った。

（『青い壺』有吉佐和子）

国語—三　二〇二二年度　東洋英和女学院中学部　入学審査問題A

㊢

問一　本文中のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

問二　[A]・[B]に入る言葉として、もっともふさわしいものを次の中からそれぞれ選んで記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度使えません）。

ア　はなはだ　イ　たちまち　ウ　ようやく　エ　とうとう　オ　ますます

問三　①このシスターがスペイン風の味つけで子供を苦しめていた　とありますが、この意味としてもっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　このシスターはスペイン料理が一番おいしいと考えていて、子供たちにも自分の好みをおしつけていたということ。
イ　このシスターは子供たちの味覚に合わないスペイン風の味つけで、食べる気になれなくさせていたということ。
ウ　このシスターは料理が下手なので何を作ってもスペイン料理になってしまったということ。
エ　このシスターは油っぽいスペイン料理を食べない子供を許さなかったということ。

問四　②大きな抱負　とありますが、この内容にあたる一文をここより前の部分からさがし、最初と最後の五字をぬき出しなさい（句読点も一字とします）。

問五　③ぼう然としながら　とありますが、この時の悠子の気持ちとしてもっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　がっかりする気持ち
イ　怒りがこみあげる気持ち
ウ　おどろきあきれる気持ち
エ　不安になってくる気持ち

問六　④気をよくして　とありますが、どのようなことですか。他の言葉で言いかえなさい。

問七　⑤悠子は日記の中に、誇らかに「今日も成功」と書いた　とありますが、この時の悠子の気持ちにもっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　私は調理法を工夫して子供たちに給食をおいしく食べさせられる、優れた栄養士だ。
イ　神様がいつも守って下さるからおいしい料理を作ることができて、感謝している。
ウ　シスターたちも私の料理の技術には一目置かずにはいられないだろう。
エ　シスターたちが協力してくれるから私の料理が成功しているのだ。

問八　⑥もはや敵はほうれん草しか残っていない　とありますが、どういうことを悠子にとっての「敵」という言葉で表しているのですか。考えて自分の言葉で答えなさい。

問九　⑦悠子は自分一人でほうれん草を洗い　とありますが、その理由としてもっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　自分以外の人にはほうれん草のスープは作れないと思ったから。
イ　だれも新人の悠子の手伝いを進んでしようとは思わないから。
ウ　ほうれん草を使ったスープにはみんなが反対していたから。
エ　自分一人でも成功するという自信がついていたから。

問十　二か所の▨には体の一部分を表す同じ言葉が入ります。その言葉を漢字一字で答えなさい。

問十一　⑧料理は目で食べる　とありますが、この意味としてもっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　料理は見た目の美しさがすべてだということ。
イ　料理は目で見て安全性を確かめるものだということ。
ウ　料理は見た目がおいしそうだと食欲が増すということ。
エ　料理は使われた食材がわからないほうがよいということ。

問十二　⑨涙がこぼれ落ちた　とありますが、この時の悠子の気持ちとしてもっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　先生方にほうれん草のスープをけなされたところを、一番見られたくなかったシスター・マグダレナに見られてしまい、ばつが悪くていたたまれない。
イ　先生方にほうれん草のスープをけなされて、困惑していた悠子を、シスター・マグダレナが心配して見ていてくれたのではずかしくなり、よけいにつらさがこみあげた。
ウ　先生方にほうれん草のスープをけなされているところを、いつも自分の料理をほめてくれたシスター・マグダレナに見られてしまい、なぜ自分の味方になってくれないのかとくやしく情けない。
エ　先生方にほうれん草のスープをけなされている姿をシスター・マグダレナに見られてしまい、なぜ作っているときに注意してくれなかったのかといらだっている。

問十三　（　　）に入る言葉としてもっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　もてあましている
イ　見下している
ウ　あわれんでいる
エ　責めている

問十四　⑩悠子は、また涙が止まらなくなった　とありますが、この時の悠子の気持ちとしてもっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　自分の方が味覚が優れていると少し見下していたシスター・マグダレナに同情され、なぐさめられていることがくやしい気持ち。
イ　シスター・マグダレナのスペイン風の味つけが良くないと思っていたのに、そのスペインに伝わるメロディーになぐさめられて敗北感を深くした気持ち。
ウ　自分の腕に自信を持ち、先生たちに信頼される栄養士になったと思っていたのに、一回のあやまちですべてをなくしてしまい、絶望的な気持ち。
エ　シスター・マグダレナの優しい言葉にふれることで、すなおな気持ちになり、自分が思い上がって子供のことを一番に考えていなかったことを反省する気持ち。

問十五　⑪悠子さんの心　とありますが、これはどのような心ですか。本文をよく読んで自分の言葉で答えなさい。答えは左の解答らんに直接書きなさい。

写

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。答えは、指定されたもの以外はすべて黄色の解答用紙に書きなさい。

　家族旅行で遠出をしたことがない。関東で生まれ育った私が幼少時連れていってもらったのは、注近郊（街から少しはずれた土地。郊外）の、箱根や熱海、伊豆である。たのしかったという記憶はあんまりなくて、あれを買えとだだをこねたなあ、とか、もう歩きたくないと言い張ったなあ、とか、父がひとり先にいってしまったなあ、とか、そんなことばかり思い出す。私は旅の好きな子どもではなかった。知らない場所が好きではなかった。めずらしい食べものにも乗りものにも興味がなかった。置いていかれたらどうしようと、そればかり思っていた。

　①それでも、旅の記憶は自身の内の、奥深くに残っている。東海道線に乗るたびに、そのことに気づく。西に向かう列車が、小田原近辺にさしかかると、左手に海が見える。運よく左側の席にいると、私は子どものように窓に額をはりつけて、海に目を［Ａ］。②そうしながら、気づかされる。この海が、私にとって旅の扉のようなものなのだと。旅が非日常だとするならば、小田原近くから見える海は、日常と非日常の、その境だと幼少期に**ス**りこまれているらしい。

　熱海が近づくにつれて、海はぐんぐん広くなる。大人だからそんなことはしないが、③わあ、海だ海だとさけびたくなる。何度見ても、そうなる。

　旅、といってもさまざまで、一ヵ月、一言も言葉のわからない国を移動し続ける大きな旅もあれば、注近場（わりあいに近い場所）で一泊という、ちいさな旅もある。熱海は私にとってちいさな旅先だ。東海道線の快速に乗れば東京から一時間四十分ほどで着くし、日帰りも可能だ。何度もきているから、めずらしい光景に目を［Ｂ］こともない。温泉にいこうと友だちと熱海を目指すとき、④そもそも私の内に「旅をする」感覚がない。それでもやっぱり、このちいさな移動も非日常なのだなと、東海道線の窓から見える海を見るたび実感する。旅の定義というのは、距離が遠い近いということとは関係がなくて、この、非日常の扉があるかないかなのだと思う。

　思えば、子どもは動物のように注テリトリー（なわばり。自分がふだん行動するはん囲）にびん感だ。自分の知らないところにいくと、とたんに不安になる。自分の知らない時間帯も、やっぱりざわざわとこわくなる。昼間、いつも乗っているバスに、夜ふけに乗っているだけで私は泣きそうにこわかった。そうした不安こそ、⑤非日常の扉をくぐったあかしなんだろう。子どもはいくつもの扉をくぐって、非日常を旅と名づけることを知る。

　熱海の町や海**ゾ**いを歩くと、子どものころの旅の記憶、不機嫌な幼い自分が⑥あぶり絵のようにうかんできて、目の前の景色に重なる。空間だけでなく、時間も旅することのできる大人になったのだなと、そんなとき気づく。

〔「旅の扉」角田光代（「トランヴェール」二〇一一年八月号）〕

問一　本文中の**カタカナ**を漢字に直しなさい。

問二　①それでも　とありますが、「それ」の内容にもっともふさわしい一文をここより前の段落からぬき出しなさい。

問三　［Ａ］［Ｂ］に入る言葉として、もっともふさわしいものを次からそれぞれ選んで記号で答えなさい（ただし、同じ記号は二度使えません）。

ア　うばう　**イ**　かける　**ウ**　みはる　**エ**　こらす　**オ**　おおう

問四　②そうしながら、気づかされる。この海が、私にとって旅の扉のようなものなのだと。　を、意味が変わらないようにして一つの文に書き直しなさい。

問五　③わあ、海だ海だとさけびたくなる　とありますが、それはなぜですか。もっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　列車の窓から海を見ることで、旅に出たという実感がわいて自然とわくわくしてくるから。
イ　子供のころはいやいや旅に出かけていたので、海を見ると旅の不安が思い出されて落ち着かなくなるから。
ウ　筆者にとって海は見慣れないものなので、海を見ると無邪気な子ども時代が思い出されるから。
エ　潮風や陽光の明るさをとても楽しみにしているので、海を見ると他の客たちにも教えたくなるから。

受験番号　写

氏名

問六　④そもそも私の内に「旅をする」感覚がない　とありますが、「そもそも」はどこにかかっていきますか。次から選んで記号で答えなさい。

そもそも　ア私の　イ内に　ウ「旅をする」　エ感覚が　オない。

問七　⑤非日常の扉　とありますが、本文に書かれている「非日常の扉」をくぐることの例として、あてはまるものには○を、あてはまらないものには×をそれぞれ書きなさい。

ア　夜、忘れ物をどきどきしながら学校に取りにいくこと。
イ　毎朝、よくほえる大きな犬の前をこわごわ通り過ぎること。
ウ　夜、寝る前には、ねまきに着がえて歯みがきをすること。
エ　夏休みに、大好きな「赤毛のアン」の舞台であるカナダを訪ねること。
オ　幼稚園に行き、ブランコに乗ると、幼いころの記憶がよみがえること。

問八　⑥あぶり絵のようにうかんできて　とありますが、これはどのような様子のことですか。もっともよくあてはまるものを次から選んで記号で答えなさい。

ア　あいまいなものが、色あせた状態で見えてくる様子。
イ　消そうとしてもしつこく頭に残ってなかなか消えない様子。
ウ　見えないものが、せん細で美しい状態でゆっくりと現れてくる様子。
エ　何もない状態からぼんやりと浮かび、しだいにはっきりとしてくる様子。

問九　この文章の内容をふまえて、「非日常の扉」をくぐったあなた自身の経験を書きなさい。答えは左の解答らんに直接書きなさい。

国語

二〇二二年度　東洋英和女学院中学部　入学審査解答用紙A

受験番号

氏名

一

問一　ココロザ（　）した　元来（　）　高名（　）　ヨウリョウ（　）　キビ（　）しく

問二　A（　）　B（　）

問三（　）

問四（　）〜（　）

問五（　）

問六（　）

問七（　）

問八（　）

問九（　）

問十（　）

問十一（　）

問十二（　）

問十三（　）

問十四（　）

問十五（国語―四の解答らんに直接書きなさい）

二

問一　ス（　）りこまれて　海ゾ（　）い

問二（　）

問三　A（　）　B（　）

問四（　）

問五（　）

問六（　）

問七　ア（　）　イ（　）　ウ（　）　エ（　）　オ（　）

問八（　）

問九（国語―六の解答らんに直接書きなさい）